

# 発展学習のきっかけをつくる：学生によるブックフェアの試み

磯村 陸子

## Encouraging Students to Read : Classroom Book Fair

Rikuko ISOMURA

担当科目「保育の心理学」において実施した、学生による図書紹介の試みの概要とその効果について報告する。本授業では、学生の授業外での自主学習、発展学習のきっかけづくりとして、各学生が子どもの発達理解に役立つ本を推薦図書として持ち寄り、相互に紹介し合う本の見本市（＝ブックフェア）の機会を設けた。

### 1. はじめに

子ども・家庭をめぐる社会環境が急激に変化する中、保育現場に寄せられる期待や要請は、教育的機能の充実、子どもの発達保障など、近年一層高まり、また多様化している。それに伴い、保育の主要な担い手となる保育者の専門性のさらなる向上が急務となっている。保育者養成課程においては保育者に必要な専門知識の教育とともに、専門的な知識をベースに子どもの実態や現場での課題に対応する実践力の育成が求められており（保育士養成課程等検討会、2010）、保育の場の現実により即した知識や力の習得をめざしたカリキュラムの改訂が行われてきている。しかし、実践力の育成はもちろん養成課程の中で完結するものではない。変わり続ける現場でのニーズに応じ、養成課程を修了後も新たな知識を吸収し、実践を通じ学び続ける力を備えていることが専門家としての保育者の重要な資質となる。養成課程においては、自ら学び続ける力やそれを支える学習技術を培うことも実践力を育成する上での重要な課題となる。実習をはじめとした「現場で経験から学ぶ」機会を通じそうした自ら学ぶ力を高めていくとともに、講義や演習等を含めた養成課程におけるあらゆる学習機会を通じ、学生の自主的な学習やそれを支える学習技術を高める努力を行っていく必要がある。

しかしながら、特に講義形式の授業は、ともすれば教

師からの一方向的な知識注入に傾きがちなためである。保育士養成課程のように学習すべき内容が規定されている分野においては、効率的に学習内容をカバーするという目的のもと、一層、一方向型の授業に陥りやすいように思われる。そうした授業の経験が学生にもたらす影響は、当該授業の学習や学習成果を越え、「授業で示された学習内容さえ習得すればよい」「学習すべき内容は教師から与えられるもの」といった学生自身の知識観・学習観に及ぶ可能性がある。講義科目においても学生の自主的な学習への意欲やそれを支える学習の技術を学ぶ機会やしなを工夫していく必要があると考えた。

### 2. ブックフェアのねらいと実践の経緯

そこで、講義科目の中で、学生の自主的な学習、授業外での発展的な学習のきっかけをつくる手段として、「本との出会い」「本からの学び」に注目した。自ら学ぶ力を表す概念である「自己教育力」に関するいくつかの研究から、保育者や看護師など専門職の養成課程で学ぶ学生の「自己教育力」の高さや向上と、図書館や情報システムの利用頻度（牧野ら、2008、2009）や読書量（長谷部、2010）との間に関連が指摘されている。これらの研究は、学生が自ら学ぶための学習環境や学習方法を確立していることが、自ら学ぶ力の高さの証であり、また自ら学ぶ力を更に高める可能性を示唆している。こうした観点からも、本を通じて自分の興味・関心をさらに追究するという学習の在り方を学生に提示することは有効であると思われる。

本授業、「保育の心理学」は、保育士資格取得のための必修科目であり、1年後期に開講されている。本授業の目的は、乳幼児期の子どもにみられる様々な行動や現象の意味を、乳幼児期の発達過程と関連づけて理解す

ること、それを通じ子ども理解・支援に必要な専門的知識や視点を身につけることである。各回ごとに「言語発達」「愛着」等、主に発達心理学領域のトピックを取り上げ基本的に講義形式で進めている。


これまで授業において、毎回の授業に対する質問・感想に対する応答は行ってきたが、多くの場合、一方的な情報提供や補足的な解説に留まるものであった。また発展的な学習を促す目的で、毎回の授業トピックに関連した図書を紹介・回覧するなどの試みを行ってきたが、学生からの反応は薄く、それらの情報を学生側がどう受け止めていたかについてはこれまで特に検証を行ってこなかった。過去の当該科目の授業評価アンケート等からは、課題や試験の必要性に迫られての学習は多くの学生が行っているものの、それ以外に何らかの学習を行っている学生はごく一部であることが示されており、授業で芽生えた興味や関心は一時的なものにとどまり、発展的な学習へと具体化することなく次々と立ち消えて行っているという実態があるのではないかと感じられた。

そこで一昨年度は、毎回の授業の冒頭15分間を利用して、学生自身が交代で「子ども理解に役立つ図書」を紹介する試みを行った。学生の感想等から、この試みについて一定の手ごたえは感じられたものの、毎回の講義時

間確保との兼ね合いや、回を重ねるごとにマンネリ化が生じるなどの問題点も生じた。そこで昨年度は、授業15回のうちの1回を、全学生が一斉に推薦したい図書を持ち寄り、紹介しあう見本市（＝ブックフェア）とする形で同様の試みを行った。実施時の感想から、ブックフェア形式のもつ効果について一定の手ごたえを得た。そこで2011年度も引き続きブックフェアを実施し、合わせて効果について実践後の追跡調査を行うこととした。

### 3. ブックフェア実施の概要

後期授業15回のうち、冬季休暇前の1回（第11回）をブックフェアに充てた。本授業の履修者である1年生にとって初めての保育所実習、福祉施設実習が2月～3月にかけて予定されており、実習に対する準備の意識が高まる時期であること、また、学生がフェアを通じ知った図書を冬季休暇中に手に取ることを期待できる等の理由から、この回に設定した。初回のガイダンス時に、ブックフェアの実施について予告説明し、当日に向け他の学生に紹介したい図書（推薦図書）の選定と、図書を紹介するチラシづくり（サンプルは図1参照）等の準備を行っておくよう指示した。学生に提示したブックフェア概要は以下のとおりである。

紹介者： 

## 今どんな気持ち？

★内容紹介

笑ったり、泣いたり、怒ったり、毎日驚くほど色々なことが起きる保育園と幼稚園。「何を伝えたいの？」「どんな気持ちなの？」「突然どうしたの？」と、まだ言葉で説明できない子どもの状態を知ることが簡単なことではありません。


この本では年齢別に事例が述べられ、子どもが今日の発達過程にいるのかを把握しやすいようまとめられています。また、発達する子への心遣いや保育の工夫することが載っています。他にも自分自身を知るためのページがあり、自分の長所・短所に気づくきっかけとなる内容となっています。

身体発達には心の発達も密接に関係し合っており、片方が欠けることはあってはならないことです。日々保育園は大変忙しいですが、子どもの気持ちを汲み入れる心の余裕をこの本で作ることができるかと思えます。

『心の保育を考える』 本体 1,600円  
ラボム編集局(編集)・学研(出版)  
※増大図書館にあります。【読本図書室】

★おすすめ

毎日引きのくは可愛らしい絵です。読むことも、事例を見つけることも楽しくなります。また、事例内容はすぐ思いつくような出来事だけではなく、毎日保育園で起こっている上で「まさかこんなことが…」と驚いてしまうような出来事が述べられているところがめずらしいです。そして、言葉で伝えきれないときに活用できるおすすめの絵本などまで載っています。



## なぜ誘拐したの？ なぜ私だったの？

# 『八日目の蟬』

角田光代 中央公論新社  
※増大図書館にあります(図1参照)

★内容紹介★

この本は誘拐を題材にした小説で、母性テーマにしたサスペンス作品です。

第1巻では子供を誘拐した女、野々宮幸和子は犯人であった杉山文雄の家に侵入し、赤ちゃんを見て保衛的に誘拐する。その子と親を近づける。警察が捜しつけてくることを知る。公園で天然水や自然食を販売していた団体の、エンジェルホームに身を預けることを決意する。しばらく平穏な生活を送るが……。(幸和子の目線から書かれている)

第2巻では幸和子が産後17年後の2005年、誘拐された事実は大抵の事実は大抵の事実にあつたことを知れようとしていた。すると、かつてエンジェルホームにいた幸和子と幸和子が誘拐されて、誘拐事件の真相を突き出すとしている。真実を自ら手探りで探していき、そして幸和子と幸和子の「親子関係」を少しずつ思い出していき……。(誘拐事件の目線から書かれている)

★おすすめ★

幸和子のしたことはもちろん犯罪である。決して許されることではないが、幸和子が自分の子供ではないことを知ると、必ずしも生きていく必要はない。幸和子と幸和子の関係が全巻の目線で書かれていく。幸和子の目線から書かれている。幸和子の目線から書かれている。幸和子の目線から書かれている。

血は繋がっていても愛は繋がっていません。決して許されることではないが、幸和子が自分の子供ではないことを知ると、必ずしも生きていく必要はない。幸和子と幸和子の関係が全巻の目線で書かれていく。幸和子の目線から書かれている。幸和子の目線から書かれている。幸和子の目線から書かれている。

母性が子どもに与えてくれる力。大抵の事実は大抵の事実にあつたことを知れようとしていた。すると、かつてエンジェルホームにいた幸和子と幸和子が誘拐されて、誘拐事件の真相を突き出すとしている。真実を自ら手探りで探していき、そして幸和子と幸和子の「親子関係」を少しずつ思い出していき……。(誘拐事件の目線から書かれている)

この作品はドラマ化、映画化にもなっているが、読者の目線から書かれている。幸和子の目線から書かれている。幸和子の目線から書かれている。




図1 推薦図書紹介用チラシの例（学生作成のもの）

①ブックフェアの概要と目的：子どもの内面や心身の発達を理解しようとすることは、保育者にとってとても大切なことです。実際に子どもと触れ合う中でわかること、受け取るものはたくさんあります。しかし、本を通じた学びにはそれとはまた違ったよさがあります。現実世界の問題に立ち向かっていくための手がかりとなるような専門的な知識を身につけること、小説やマンガといったフィクションの中で描かれた子どもの心の動きに触れ、それを追体験していくこと、本は実際の子どもとの関わりとは異なった知識や体験をもたらしてくれます。そんな本との出会いを広げるために、お互いに「これはいい！」という本を紹介し合いたいと思います。当日は実際に本を持ってきて、見る機会を作りたいと思います。

②図書の選定範囲：子どもの心身の発達やその支援に関する専門書、及び、乳児期から児童期までの子どもの成長や子育てを扱ったノンフィクション、小説、マンガ

③図書紹介用チラシの内容：チラシには以下のような情報を掲載すること。チラシ作成者の氏名（学籍番号）、本に関する基本的情報（タイトル、著者、出版社名）、内容紹介、参加者に向けた本書のキャッチコピー、特に伝えたいポイントや感想、本学図書館での所蔵の有無。

当日までの授業の中で、図書の選定・準備状況を確認し、選定に迷っている学生については個別に助言を行った。

当日は、図2のように教室に各学生が自分の推薦図書と図書の紹介チラシを展示し、全員が教室内を自由に巡り図書を閲覧する形式を採用した。以下のような手順で閲覧・発表を行った。なお、当日の参加者は、本授業の履修登録者171名（84名、87名の2クラスで実施）のうち、155名であった。

1. 自由閲覧：全員が一斉に教室内を巡回し互いの推薦図書やチラシを閲覧
2. 読書リスト作成：ワークシートに自分が読みたいと



図2 ブックフェア当日の様子

思う本をリストアップする

3. 発表：推薦図書を口頭で紹介する（10名程度）
4. ふりかえり、事後アンケート記入

昨年度の実践をふまえ、各学生が自由に移動し図書を閲覧しやすいよう教室のレイアウトを工夫する、口頭での紹介・発表よりも図書を自由に閲覧する時間を十分に確保する、また、各自が興味を持った本の情報を記録し持ち帰るためのワークシート（「これから読みたい本リスト」）を準備するなどの改善を行った。

## 4. ブックフェア実践の成果

### 1) 履修者の特徴：事前アンケート

図書との接触や授業外での学習に関する学生の実態を把握するため、ブックフェア実施前に事前アンケートを実施した。

#### ①読書習慣

日常的に本や雑誌を読む習慣があるかどうかを尋ねた（「1ヶ月に何冊くらい本（雑誌）を読みますか？」）。結果は図3のとおりであった。



回答した154名のうち、114名（74.3%）が、書籍を「ほとんど読まない」と回答した。「読む」と回答した学生のうち、月平均冊数が0～5冊の該当者は、34名（21.9%）、5冊以上が6名であった。また「読む本のジャンル（複数回答可）」として最も多く挙げられたのは、「小説」（24名、15.5%）であった。少数であるが「専門書」を挙げた学生もみられた（5名、3.2%）。一方、雑誌については、「ほとんど読まない」を選択した者は39名（25.1%）であった。「読む」と答えた学生のうち、月平均2冊が最も多く、43名（27.7%）であり、5冊以上を挙げた学生も20名（12.9%）みられた。「読む雑誌のジャンル」（複数回答可）として最も多く挙げられたのは「ファッション誌」（95名、61.3%）、次いで「マンガ」（34名、21.9%）であった。以上の結果から、大多数の学生が書籍を日常的に読む習慣を持たないこと、中でも授業外で日常的に専門に関する図書等に接触している学生はごくわずかであるという実態が明らかになった。

## ②授業に触発された自発的な情報探索経験

課題などの必要性に迫られた場合以外で、授業で触れた事柄について更に学ぶため、もしくは実習に向けた準備のために、インターネットや図書館を利用し、自発的に情報を探索した経験があるかどうかについてもアンケートで尋ねた（「短大入学後、授業で聞いたり、実習などに向けて、興味を持った事柄について、関連する本や、紹介された本を探して読んだり、インターネットで調べたりなど、さらに学ぶための行動をしたことがあり

ますか？ ※課題や試験のための場合は除く」）。

結果は図4のとおりである。半数以上の学生が、そうした情報探索を行ったことがないことが示された。一方、わずかではあるが、10回以上（4名、2.6%）、20回以上（2名、1.3%）情報探索を行った経験があると答えた学生も存在した。

さらに、どのようなきっかけでそうした行動をとったのかについて自由記述の内容を検討したところ、「授業の中で紹介された本」を探したという回答（13名、8.4%）や、特定のテーマについて本を探したという回答（17名、11.0%）などがみられた。また探索場所については、「図書館」（34名、21.9%）、「インターネット」（18名、11.6%）への言及が多かった。また、中には、「図書館で本を探した。疑問に思ったことはすぐネットで調べる」「先生のお勧め本、知らない事を授業で耳にしたり、授業で興味がわいたことがあったらネットや本で調べる。（新生児反射など）」のように、情報探索が習慣となっていることを示唆する回答もみられた。一方、興味を持った内容としては「虐待」（14名、9.0%）が最も多く、次いで多かったのは「子どもの発達」（13名、8.4%）であった。

以上の結果から、興味を持った事柄について単発的に情報を探索した経験は半数近くの学生に見られたものの、そうした行動が習慣となっている学生はわずかであること、一方半数近くの学生には、入学後、自発的に授業に触発された情報探索を行った経験がないことが明らかになった。

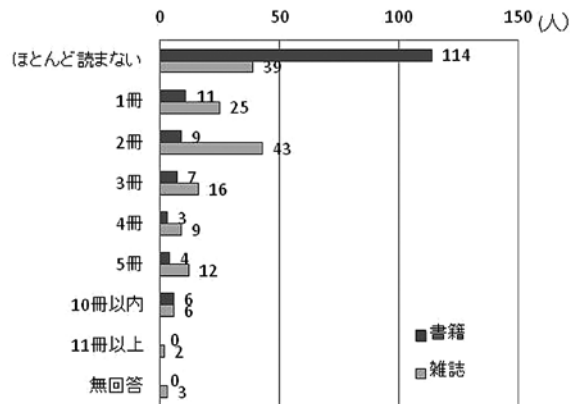


図3 1ヵ月の平均読書量（書籍・雑誌）

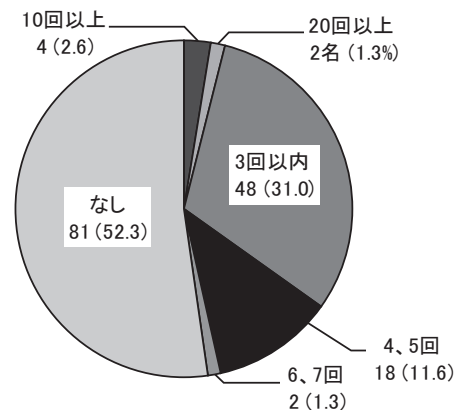


図4 授業に触発されて情報探索を行った回数（本学への入学以降）

### ③本授業への興味・関心

事前アンケートでは、本授業の内容に対する興味・関心についても尋ねた。「かなり興味あり」から「まったく興味なし」の6段階から選択を求めたところ、「かなり興味あり」17名（11.3%）、「まあまあ興味あり」71名（46.1%）、「どちらかといえば興味あり」46名（29.9%）、「どちらかといえば興味なし」12名（7.8%）、「あまり興味なし」7名（4.5%）、「まったく興味なし」1名（0.6%）であった。本授業で扱っている内容への興味・関心自体は比較的高いことが示された。

## 2) ブックフェアへの参加行動：事後アンケート

### ①学生の推薦図書への傾向と選定方法

今回の学生の推薦図書の傾向について尋ねた結果が図5である。テーマ別の傾向としては、「発達障害など」に関する図書が3割近くと最も多かった。また、保育を行う上で参考となるような保育論、もしくは手遊び百科のような、具体的な保育に関する技術を扱ったものを含めた「よりよい教育・保育」に関する図書を取り上げた学生も多くみられた。発達障害等は、本授業でも取り上げており、元来学生の関心が高いテーマである。また保育所・福祉施設での実習を見すえ、学生の意識が高まっていることも、こうした傾向の背景にあると思われる。その他、個人の子育て手記や子育てに関するハウツー本などを含む「子育て一般」に関する図書や、「虐待」の問題を扱った図書への関心も高かった。特に「虐待」に

ついては、事前アンケートから示唆されたように、他授業で取り上げられたことなども影響し、学生の関心が高いようである。

一方、ジャンル別にみると、「専門的な解説書」が3割程度と最も多く、次いで「ノンフィクション」であった。また、「小説」や「絵本」、「マンガ」、も一定数みられた。多様な図書が出版されている現在、同じテーマを扱っていても、表現形式は様々でありうる。例えば、「自閉症」というテーマについて、専門的な解説書、子ども向けに障害を解説する絵本、自閉症児の子育てをテーマとするマンガ、手記など、様々なものが存在する。こうした多様性が学生の推薦図書の傾向にも反映されたものと考えられる。

### ②推薦図書の選定方法

各学生がどのような経緯で推薦図書を決めたのかについてもアンケートで尋ねた。その結果、半数近くの学生が、今回のブックフェアのために図書館や地域の図書館で新たに図書を探したことが明らかになった（73名、74.3%）。書店で新たに図書を探し購入した学生も1割程度みられた（19名、9.1%）。一方、過去に読んだ図書を紹介した学生も3割程度みられた（44名、28.6%）。また、存在自体は知っていたが未読であった図書をこの機会に読み紹介したというケースもみられた（10名、6.5%）。

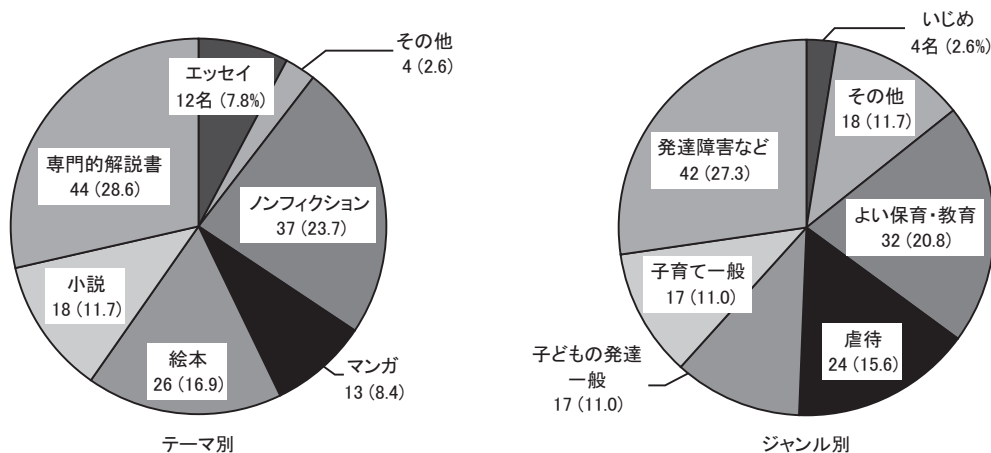


図5 学生がブックフェアで紹介した図書（推薦図書）の傾向

表1 ブックフェアに参加した感想

カテゴリー	感想	例	該当数(%)
【紹介してもらえることの良さを感じた】	保育士になるにあたってたくさんの知識や理解が必要だが、どんな本を読んだらいいのか悩んでしまう。友達がお勧めの本ならと、まず手にとることができてこういった機会は素晴らしいと思った。		41 (27.2)
【知らない本に出会えた】	自分の知らない本がたくさん見つかった。どの本もそれぞれ良く、読みたいと思う本を見つけた。機会があれば読んでみたい。		32 (21.5)
【多様な本があることに気づいた】	自分の知らなかった本で、文章だけでなく絵本、マンガなどで書かれた読みやすく伝えやすいような本がたくさんあって驚いた。自分の理解を深めるためだけでなく、子どもに伝えたい時の参考になる本が見つかった。		15 (10.1)
【特定の本(分野)に興味持った】	保育する上で読んだら役に立ちそうだなと思う本がたくさんあった。発達障害の子どもについてもっと知りたいので今度本を買いにいきたい。		13 (8.7)
【普段本を読まず良いきっかけになった】	今まで全然本を読んで来なかった。読みたいと思う本があってもなかなか読むことができず本というものを本当に読んでいなかった。今回たくさん本をみて、読みたいという気持ちがあふれてきた。マンガでもいいんだなと思えた。		13 (8.7)
【推薦本を探す過程も意義があった】	皆に紹介する本を選ぶことで、これをやらなければ出会わなかった本を見つけることができた。また皆の本を見ることで自分とは違った視点から選んだ本にも出会えてよかった。		8 (5.4)
【たくさん本に出会えた】	たくさん本と出会うことができてよかった。		6 (4.0)
【知っている本を再発見できた】	改めて読みたいと思う本が何冊も見つかった。		5 (3.4)
【興味を持った本があった】	今まで見たことのない本などがあり、興味を持った。		5 (3.4)
【本というものの良さを感じた】	今まで自分が知らない本、読んだことない本がたくさんあり、たくさん本の興味を持った本をぜひ読みたいと思った。今まで自分はこんな良い本に出会わなくて損をしたなと思った。もっともっとたくさん本の良い本に出会いたいと思った。		4 (2.7)
【同じ本を紹介していることに気づいた】	同じ本を何人かが選んでいた、いい本なのかな、などわかった。		4 (2.7)
【その他】	たまにやりたい。		4 (2.7)

## ③ブックフェアに対する評価

ブックフェアで紹介されていた本の中から、関心を持った本、読みたいと思った本を見つけることができたかどうかを尋ねた。「たくさん見つかった」「少し見つかった」「全く見つからなかった」の3段階での評価を求めたところ、回答した149名中、113名(75.8%)が「たくさん見つかった」と回答し、36名(24.2%)が「少し見つかった」を選択した。「全く見つからなかった」と回答した学生はみられなかった。またブックフェア中に各学生が自分の「読みたい本リスト」を作成するようワークシートを配布したが、ほとんどの学生がワークシートの最大記入数である6冊分の図書情報を記録していた。多くの学生にとってブックフェアは具体的に読みたいと思う本と出会うきっかけとなったことが示唆された。

また、ブックフェア全体に対する評価を「今回のようなブックフェアを、来年度の授業でも実施すべきかどうか?」という形で尋ね「ぜひやった方がよい」から「やめた方がいい」までの5段階で回答を求めた。その結果、

「ぜひやった方がよい」107名(71.8%)「どちらかといえどやった方がよい」36名(24.2%)が合わせて9割以上を占めた。学生が概ねブックフェアを評価していることが示唆された。

## ④ブックフェアへの感想

ブックフェアに対し自由記述による感想を求めた(「ブックフェアを実施してみても感想を述べてください。得られた自由記述を、表1に挙げた12のカテゴリーに分類した。ほぼ全ての感想が集まった本の量に言及していたため、その他のカテゴリーにあてはまる記述がなく、量のみについて述べている場合にのみカテゴリー【たくさん本に出会えた】に分類した。毎回数名が本を紹介する形式ではなく、70名ほどが持ち寄った本を一度に展示し紹介するブックフェアの形式であったことが、参加者に本の量を印象づけ、こうした回答傾向をもたらしたものと考えられる。

分類の結果、【本を紹介してもらえることのよさ】に

言及した回答が多数みられた。表1の回答例のように、学生の多くが図書選びの難しさを感じており、興味・関心の近い友人が薦める本であることの利点に言及した感想や、「いろいろな人の感想を見る事が出来て読んでみたいと思う本が何冊もあった。みんなの意見やオススメポイントが読めてよかった」のように、感想をまとめたチラシが読みたい本を選ぶ手がかりになったという感想などがみられた。単に本を知ることができるだけでなく、他者の視点を通じて知ること、またそれが友人の視点であることの良さを感じた参加者が多かったようである。一方、【推薦する本を探す過程も意義があった】のように、自分自身の推薦図書を探すため何冊もの本を読んだこと、本の良さを他者に伝えるために読み、チラシづくりの中でそれを言語化するというプロセス自体に意義を見出した感想もみられた。

さらに【普段本を読まず、良いきっかけになった】【本というものの良さを感じた】のような感想からは、普段あまり本を読む習慣がない学生が、ブックフェアで具体的に何冊もの本に触れ、「読んでみたい」「読んでみよう」という意識を持ったことが示された。また【多様な本があることに気づいた】のように、専門的な解説書だけでなく、マンガや小説など様々なジャンル、表現形式の図書に触れることができたことのよさに言及する感想もみられた。

事前アンケートで示されたように、今回参加者した学生の多くが日常的に雑誌以外の本を読む習慣を持たない。こうした学生にとって、ブックフェアは、多様な本が出版されている現状を知り、その中には自分の興味・関心に合った本も数多く存在するということを実感する機会となったのではないだろうか。

#### ⑤学生からみた要改善点

ブックフェアの実施方法等について可能な改善点を自由記述で尋ねた（「ブックフェアの方法や内容について、改善できそうなところがあれば書いてください」）。【ブックフェア形式ではなく、一部もしくは全体を発表形式にした方がよい】（15名、10.7%）という意見がみられた一方、【閲覧する時間がもっと必要である】（10名、

7.1%）、【もっと展示スペースをゆったりとる】（12名、8.6%）のように自由閲覧の改善に関する意見も多かった。その他、【チラシや展示の工夫】（12名、8.6%、例「チラシは写真などを使ってカラフルに」「本を種類ごとに分けて展示」）や、本の選定基準・方法の工夫についての改善（4名、2.9%、例「グループでテーマを決めてさがしてもよい」「本が重複しないようにする」）、参加者の拡大（4名、2.9%、例「先輩のおすすめ本も知りたい」）に関する記述がみられた。その他、【みんなが紹介した本のリストが欲しい】（2名、1.4%）等の意見がみられた。

#### 3) ブックフェア後の行動：フォローアップアンケート

ブックフェアの実施から、冬休みを挟みおよそ1ヶ月後の授業時に、フォローアップアンケートを実施した。フォローアップアンケートでは、「ブックフェアを体験してみて、その後のあなたの様子について当てはまるものに○をつけてください」として、図6に示したような選択肢を提示し回答を求めた。

その結果、30名弱が、ブックフェアで知った本や類似の本など、ブックフェアに触発され、実際に何らかの読書を行ったと回答した。また、14名が、実際に読書するには至らなかったものの、興味を感じた本についてさらに情報を求める行動を行ったと答えた。

一方、半数以上の84名が「春休みに読んでみようと思う」を選択しており、1ヵ月後のフォローアップアンケートの時点では具体的な行動には至っていないものの、時間的な余裕があれば読書したいという意欲自体は持続している可能性が示唆された。

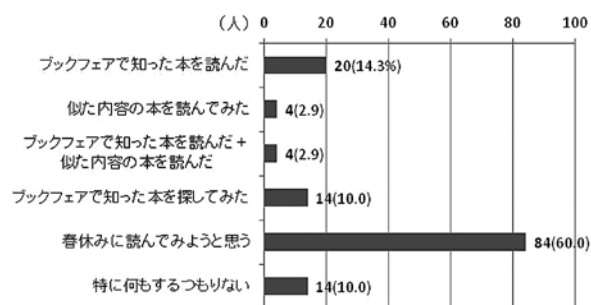


図6 ブックフェア後の行動（約1ヶ月後に調査）



## 5. まとめ

以上のような結果から、持続的な効果については疑問が残るものの、ブックフェアの実施が学生にとって多様な本との出会いの場となったこと、実際に出会った本を読むという行動につながったケースが一定数みられたことが明らかになった。特に、日常的な読書習慣のない学生にとっても、ブックフェアへの準備や参加が、少なくとも「まずは読んでみる」機会となったこと、多様な本の存在を知り、「読んでみたい」という意欲を持ったことは大きな成果であったと考える。本を通じ、授業で扱った内容や、興味・関心を持った事柄についてさらに学び、子ども理解を深めることができるという選択肢の存在に気づく機会となったのではないだろうか。また、学生自身が本を選び互いに紹介し合うことの良さ、楽しさを実感できたという経験は、学習者自身が発信しそれを交流しあうことが学習の価値を高めることを実感する経験でもある。

「自ら学ぶ・学び続ける力」の育成は、もちろん教師や保育者の養成課程においてのみ問題となる課題ではなく、大学教育全体に課せられた課題となっている。これまで主に小・中・高校教育の文脈で議論・研究が行われてきており、大学教育をめぐる状況の変化に伴い、遅まきながら高等教育に関する議論の中でも重要な問題として位置付けられるようになってきたという経緯がある。たとえば安永（2009）は、こうした流れを背景に、従来の教師中心の一方向型の授業から、学生参加型授業など、学生の能動的な学習活動（アクティブ・ラーニング）への転換の必要性を指摘し、協同学習の視点から、大学教育において既に多くの取り組みが行われ始めている。学習形態を大幅に改革する一方で、講義科目においても、さまざまな機会を通じ、学生自身が主体となる学習経験を繰り返し提供することで、講義を聴講するという学習形式自体に対する学習者の受け止め方や、学習活動の中での位置づけの変容が期待できるのではないだろうか。

## 引用文献

- 長谷部比呂美（2010）「短期大学生の自己教育力に関する検討（2）—保育学生の自己教育力の推移」淑徳短期大学編『淑徳短期大学研究紀要』、第49号、pp. 111-121.
- 牧野典子・中山奈津紀・堀井直子・堀 文子・山田聡子・井口弘子・渡邊実香・上田ゆみ子・足立はるゑ（2008）「生命健康科学部学生の自己教育力：第二報 入学後1年間の自己教育力」中部大学生命健康科学研究所編『中部大学生命健康科学研究所紀要』第4号、pp. 21-28.
- 牧野典子・中山奈津紀・堀井直子・山田聡子・井口弘子・渡邊実香・足立はるゑ（2009）「生命健康科学部学生の自己教育力：第3報 入学後2年半の変化」、中部大学生命健康科学研究所編『中部大学生命健康科学研究所紀要』、第5号、pp. 1-8.
- 安永悟（2009）「協同による大学教育の改善」日本教育心理学会編『教育心理学年報』、第48集、pp. 163-172.